

内外教育

2017年(平成29年)8月25日(金) 第6606号
(購読料金 税抜月額4,000円)

●昭和21年12月12日 第3種郵便物認可 ●毎週2回火・金曜日発行
(但し祝日等を除く) ●発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座
5丁目15番8号 時事通信社 ©時事通信社2017
誌面内容に関するお問い合わせ(編集部) educate@grp.jiji.co.jp
ご購入に関するお問い合わせ(業務管理部) dokusya@jiji.co.jp

時事通信社

目次

〈教育長はこう考える〉 久保栄八高知県梶原町教育長に聞く 一貫教育で課題解決……………	2~3
〈モンスター・ベアレント論を超えて〉 第315回 難しくなる保護者対応トラブル (総論③) 小野田正利・大阪大学大学院教授……………	4~5
カリキュラム・マネジメントなど討議 教育調査研究所が「展望セミナー」……………	6~7
〈地方の動き〉川口・武南中で財政の特別授業 私立中で初、夏休みの講座活用―関東財務局……………	8~9
〈2017年度学校基本調査速報(上)〉 就職者の割合が7年連続で上昇 高等教育卒業後の進路、在学状況……………	10~12
〈わたしの学校経営〉 野中 均・名古屋市立緑高等学校長……………	13
〈特集1〉次期学習指導要領改訂のポイント ⑨小学校図画工作 岡田京子・文部科学省初等中等教育局 教育課程課教科調査官……………	14~15
〈特集2〉第32回「教育奨励賞」推薦校の実践 ③千葉市立本町小学校……………	16~17
④宮崎県日向市立大王谷学園……………	18~19
〈アンテナ・スポット〉……………	20~22
〈教育法規あらかると〉 いじめ重大事態の認定……………	23
〈ラウンジ〉授業の重さ……………	24

大学の3つの方針

青森大学学長・崎谷康文



2016年3月の学校教育法施行規則の改正により、大学の卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針及び入学受入れの方針の策定と公表が義務化された。わが青森大学は、13年度に三つの方針を策定し公表していたが、本学の教育改革の格段の進展のため、見直すこととした。見直しに当たって留意したことは、2点。一つは、学長ガバナンスと各学部等のボトムアップの調和による深みのある合意形成に向け、大学全体で議論し策定することである。もう一つは、これまでの方針の基本的考え方を生かし、青森大学にふさわしいものとするところである。

見直しの中心的な議論は、学長の全学的な教学マネジメントの補佐を任務とする「教学改革タスクフォース」が主導して進めた。このタスクフォースには、教務委員会、FD委員会、学習支援センターなどの横断的組織の構成員が加わっており、各学部を持ち帰り議論し、また、その結果を持ち寄って全体の議論を行うことを繰り返した。文部科学省の通知は懇切丁寧で、中央教育審議会大学分科会の「ガイドライン」を参考にしよう求め、大学の質保証のためのPDCAサイクルを確立する等の考え方を示すものであった。通知を参考にしつつ、青森大学の個性と特色を明確に

表現する三つの方針の策定ができた。本学が「地域とともに生きる大学」かつ「学生中心の大学」であることを謳い、そして「生涯をかけて学び続ける力」「人とつながる力」及び「自分自身を見据え、確かめる力」を備え、専門的知識・技能を身につけた人物に学位を授与することを明示した。見直しは、文科省等の評価を得るためではなく、本学の学修成果の質的な向上を社会に広く伝えるため行ったことを肝に銘じたい。三つの方針の見直しが教職員の改革意欲を高めたことは間違いない。地域社会との連携を強化し改革を加速して、地方創生のため、積極的な役割を果たすことが地方私立大学の主体的な責務であると痛感する。



地域ぐるみの小中一貫キャリア教育

第32回時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践④

●宮崎県日向市立大王谷学園



働く意味を理解し、将来どうなりたいかを具体的にイメージできるように、体系的なキャリア教育に力を入れている宮崎県日向市立大王谷学園(橋本慎朗校長、児童生徒数1014人)。それぞれ

の校舎が「まなびの架け橋」と名付けられた渡り廊下で結ばれた併設型の小中一貫校だ。数年前までは問題行動や不登校に悩まされてお

り、その状況を打破しようと、2014年度からキャリア教育を始めた。児童や生徒の発達段階に応じて、地域のさまざまな職業の人と交流する機会を用意。市キャリア教育支援センターが運営し、大人が仕事の魅力を子どもに語る「よのなか教室」を活用したり、学校独自で外部講師を確保したりして、多様な生き方や働き方に触れられるように工夫している。

その結果、児童や生徒の学習意欲が向上しつづけるという。飯干光誠教諭は「実際に働いている人から話を聞くことで、学校で勉強している内容が社会でどのように生きているのかを感じられる」と説明する。他にも、日常的に大人と触れ合うため、あいさつや返事、言葉遣いなども改善され、社会人としての基礎を身につける機会にも

なっている。

地域の大人が先生に

キャリア教育では、社会に貢献できる「一人前の社会人・職業人」、地域を大切に作る「一人前の地域人」、家庭の役割をしっかりと果たす「一人前の家庭人」の育成を目標に掲げている。

まず1年生は、身近な家事の手伝いから取り組む。小学校で使う靴を洗ったり、洗濯物を畳んだりして、家庭生活が家族の支えで成り立っていること、自分もその一員であることへの理解を後押しする。2年生は地域に足を運び、それぞれ関心のある仕事を見学。スーパーをはじめ、幼稚園や病院、衣料品店などに訪れ、「どんな仕事をしているのか」「どんな工夫でお客さんを集めているのか」を勉強する。その成果を踏まえ、実際におもちゃを手作りし、年下の1年生に遊んでもらう「おもちゃ祭り」を開催。おもちゃの安全性はもちろん、どんなものなら使いやすく、楽しめるのかを考えながら取り組む。

3、4年生は地域のブランド調査に力を入れる。市発祥の「ひよっとこ踊り」、特産のマンゴーや

かんきつ類「へべす」、地鶏など対象はさまざまだ。

調査に当たっては、児童がそれぞれ本やインターネットで情報収集するのはもちろん、実際に現場で働いている人を講師として招いている。ひよっとこ踊りなら地元の保存会、農水産物ならその生産者を呼び、仕事をする上での苦労や喜びなどを聞く。児童からは好評で、「もつと話を聞いてみたい」との声が毎回上がるという。休日に自主的に知り合いの生産者を訪ねる児童もいるほどだ。

国際感覚を豊かにしようと、5年生では市内の国際貿易港「細島港」を取り上げる。海外滞在経験者にグローバルな視点の必要性について講演してもらい、それを踏まえ、細島港の役割を学習する。物流では荷物の降ろし作業から梱包、積み込みまで、また、近年増えつつある海外クルーズ船の寄港状況を学ぶなど、日常生活ではなかなか気付かない地元と世界とのつながりを実感できるように配慮している。

6年生は福祉教育をテーマに掲げる。市社会福祉協議会と連携し、地域の福祉活動の実態を調査。長所や短所を「地域診断書」にまとめた後、「地域を良くし隊」として実際に活動し、自分の生き方を考えるきっかけにもなる。

中学からは本格的に将来を見据えた訓練に入る。1年生では身近な将来として、高校生や大学生を招き、それぞれのような生活を送っているかを学習する。他にも、あいさつを中心とした礼儀作法、名刺の渡し方などを練習し、社会人の基礎も身につける。

また、実際に働いている人を客観的に捉えるため、「職業人取材」を行う。地元の報道機関の記者、カメラマンに協力してもらい、取材や撮影のやり方を学習。16年度は自動車販売店、美容室、リサイクルセンターなど計16社で、それぞれの仕事ぶりをビデオやカメラで撮影し、話を聞いた。ただ見学するのは違い、生徒が主体的にコミュニケーションをとることが求められるが、「甘い仕事の仕事の緊張感を味わうことができた」「仕事に対する情熱が感じられた」などと好意的な感想



中学3年生に講演する「よのなか教室」の外部講師(大王谷学園提供)

が多いという。

2年生は関心のある分野で職場体験を行うほか、これまでの学習結果を踏まえ、生徒一人一人が将来の夢やそれを目指す理由を発表する「ドリームプラン・プレゼンテーション」を実施。飯干教諭は「夢を言葉にし、仲間と共有することで、自分と向き合えるようになる」と話す。

高校進学直前の3年生では、生徒それぞれが進路や将来の設計を行う。生命保険会社の社員らを招き、「何歳までに結婚しているか」「将来の収入や支出はどのようになっているか」といった具体的なライフプランを作成。理想と現実のギャップを実感して驚く生徒もいるが、実現可能な将来を考えるきっかけになっているという。

これらのキャリア教育を支えているのが外部講師の存在だ。「日向の大人はみな子どもたちの先生」との考えから、市キャリア教育支援センターは14年度から、よのなか教室をスタートさせた。現在、さまざまな職種の大人約200人を講師登録しており、学校の要望に応じて派遣している。それ以外にも、大王谷学園が児童や生徒の参考になるような人材を独自に発掘し、協力を依頼している。

学ぶ意味、明確に

キャリア教育を始めるまでは、授業中に教室に入らずに校内をうろつき、授業を妨害するなどの問題行動を起こしたり、不登校になったりする生徒が見受けられた。高校に進学できない生徒も中

にはおり、対応に苦慮していたという。

キャリア教育の効果は特に学習面で表れている。小4～中3を対象に、今年1月に実施したアンケートによると、「学校で学んでいることは大切だと思えますか」という設問に対し、ほとんどの児童や生徒が肯定的に回答。飯干教諭は「学校での学習が将来につながるのと理解が広がり、これまでは実感しにくかった学ぶ意味が明確になっていく」と分析する。

以前までの問題行動や不登校は減少し、成績は着実に上昇しつつある。あいさつを中心とした礼儀作法も改善され、現在は地域の人から褒められることもよくあるという。

また、将来の夢や目標を持つ児童や生徒の増加にもつながっている。同ジャンケットで、「将来どんな仕事をしたか考えていますか」と職業意識を尋ねる設問にも多数が前向きな回答をしており、飯干教諭は「大人から仕事への思いを聞くことで、将来への期待が持てるようになる」と話す。地域と学校のつながりも深まる。学校の活動は普段なかなか外部に見えにくい。長友晃一指導教諭は「地域の大人がキャリア教育に参加することで、学校内でどのような活動が行われているのかを直接見ることができる」と指摘する。

キャリア教育の開始から今年で4年目。将来の夢や目標に向かって主体的に努力し続ける人材が輩出できるよう、今後も地域と緊密に連携し、小中一貫の取り組みを充実させていく考えだ。

(浦岡教之 宮崎支局)